

アイスランド中世文化と現代

松本 涼

Medieval Icelandic Culture in Dialogue with the Modern World

MATSUMOTO Sayaka

0. はじめに

2025 年 4 月から東海大学文化社会学部北欧学科に着任した松本涼と申します*¹。2014 年 4 月から 2025 年 3 月までは福井県立大学学術教養センターに所属し、一般教育科目として「西洋史」や「神話学」、「歴史学」といった科目を担当してきました。その前は、京都大学文学研究科西洋史学専修で修士号を取得した後、博士課程在学中に 2 年間アイスランド大学に留学しました。そこでは学際的なカリキュラムを備えた中世アイスランド学修士課程に所属し、歴史だけでなく文学や考古学、神話などさまざまな視点から中世の北欧・アイスランドについて学び、M.A.を取得しました。

私の専門は中世、とくに 13 世紀のアイスランドの歴史です。アイスランドは北大西洋に浮かぶ島国で、北端が北極圏に接しています。9 世紀まではほぼ無人島でしたが、ヴァイキング時代（750-1050 年）の北欧人によって発見され、870 年頃から 930 年頃にかけて、主にノルウェーから 400 家族ほどが移住することで歴史が始まりました。私のこれまでの研究は 3 つのテーマに沿っています。1 つ目が卒業論文以来取り組んでいる、中世アイスランドにおける復讐・紛争解決と権力との関係です。アイスランドでは大規模な植民の完了後、王やそれに類する上級権力が生まれず、地域ごとに権力が分散した社会が築かれました。その社会では自力救済的傾向が強く、財産の侵害や殺傷などの損害を被った場合には、当人が復讐によって紛争を解決するという慣行も認められていました。しかし、1262-64 年には全住民がノルウェー王に臣従を誓い、以後その支配に服することになります。私は、ノルウェー王の支配がアイスランド社会をどのように変えたのか、とくに自力救済的な紛争解決の慣行への影響に注目してきました。さらに、中世アイスランドで書かれた、「サガ」と呼ばれる歴史と文学の間にあるような史料から過去の世界を再構成することにも注力してきました*²。

2 つ目のテーマは、海域ネットワーク・海の社会史です。他の地域と海で隔てられ、資源に乏しいアイスランドで人が生きていくために、どのように必要物資を手に入れていたのかを考察してきました。アイスランドの食生活の要は豊富な海産物で、なかでもタラ類がよく採れ、

人々の生活を支えていました。関連して、魚食の実態や、海とジェンダーとの関わりにも関心を持っています。『アイスランド 海の女の人類学』という本の翻訳にも携わりました。本書は忘れ去られていた海で働く女性の歴史を掘り起こし、アイスランドでは 19 世紀まで性別や年齢に関係なく働ける者が働くという意識が強く、地域によっては女性の船乗りや漁師も多く活躍していたことを明らかにしています（ウィルソン 2022）。

3 つ目のテーマは、現代の創作におけるヴァイキング文化・北欧神話の受容です。このテーマは比較的最近始めたもので、海外からの要請がきっかけでした。2013 年にアイスランド大学の文学教授であるヨウン・カール・ヘルガソン氏が、漫画『ヴィンランド・サガ』の作者である幸村誠先生へのインタビューを目的に来日しました（Jón Karl 2017）。『ヴィンランド・サガ』はヴァイキング時代の北欧を舞台としており、海外でも非常に評価の高い作品です。このとき、日本の漫画やサブカルチャーにおいてヴァイキングや北欧神話はどのように受容されてきたのかといった質問を受けましたが、私たち日本人研究者は十分に答えられませんでした。2013 年の時点ではこのテーマに関する先行研究はほとんどなかったからです。そのため、2017～2020 年に共同研究を行い、まずは漫画作品における北欧神話の利用実態を調査しました*3。その後、海外でも日本でも、神話や歴史が現代社会でどのように受容されているのかというテーマへの関心はますます高まり、私自身もさまざまな発表の機会を得ました*4。最近では他地域を専門とする西洋史研究者やアーサー王物語の研究者、クリエイターの方々と協力し、漫画だけでなく、小説やゲームなど対象を広げて創作作品における中世文化の広がりを考察しています*5。本日はこの現代における北欧中世受容について、私の研究してきたこと、ならびに授業での活用事例についてご報告します。

1. 漫画『ヴィンランド・サガ』と中世研究

まず、私たちの調査にもとづくと、日本の漫画において北欧神話が初めて利用されたのは 1960 年の水野英子先生による『星のたてごと』という作品です。そこでは北欧神話に登場する「ヴァルキュリア」と呼ばれる女神たちをモチーフとしたキャラクターが使われています。ただ、北欧神話を直接参照したというよりは、北欧やドイツの神話・伝説に取材したワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』を彷彿とさせる設定が多くみられます。また、ギリシア神話のプレアデス姉妹と、北欧神話のヴァルキュリアのイメージが混ざっているのも特徴です。その後、とくに 1980 年代から関連作品が増えますが、北欧神話を深掘りするというよりも、一部の単語を人名や武器名として使用する傾向が強く、他の神話・伝説の要素と共に使用されることも多いです。そのなかで、『ヴィンランド・サガ』は緻密な時代考証の上で 11 世紀の北欧を舞台としている点で特異であり、ヴァイキングの歴史への関心を高める上でも非常に影響力が大きいと、詳しく取り上げます（松本 2019）。

幸村誠先生による漫画『ヴィンランド・サガ』は、2005 年に講談社の『週刊少年マガジン』で連載が開始され、その後『月刊アフタヌーン』へ移籍し、現在単行本が 28 巻まで刊行されています（本稿執筆中の 2025 年 7 月 25 日発刊の雑誌上で最終回を迎えました）。「ヴィンラン

ド・サガ」という呼称は、元々は 13 世紀前半にアイスランドで書かれた 2 つのサガ、すなわち「赤毛のエイリークルのサガ」と「グリーンランド人のサガ」を指すものでした。これらは紀元 1000 年前後に起きた、北欧人によるグリーンランドと北米大陸の発見・移住の経緯を語っています。中世の北欧人は北米大陸のことを「ヴィンランド」(Vinland) もしくは「ヴィー
ンランド」(Vinland) と呼んでいたので、2 つのサガをまとめて「ヴィンランド・サガ」と呼ぶわけですね。

ここで、サガ(saga)とは何かを確認しておきましょう。サガは主に 12～14 世紀にアイスランドで書かれた散文の物語群を指し、大小合わせて 200 篇以上が現在まで伝わっています。サガはアイスランド人にとって、祖先の時代に起こった過去の出来事を語るものですが、記述対象となる事件から 200～400 年後、あるいはそれ以上後に書かれているため、歴史的事実そのものを記録しているわけではありません。「ヴィンランド・サガ」を例にとると、表が示すように記述対象の事件(a～d)は 1000 年前後に起こっていますが、サガの執筆はその約 200 年後に当たる 1200～1230 年頃と推定されています。では、サガはいったい何を書いているのか、あるいは何を書いていないのか？ 漫画『ヴィンランド・サガ』との比較から、サガの性質に迫っていきたいと思います。

表 「ヴィンランド・サガ」関連年表

985 年頃	a. 赤毛のエイリークルがグリーンランドを発見、移住する
999-1000 年	b. アイスランド住民がキリスト教に改宗する
1000 年頃	c. エイリークルの息子レイヴルがヴィンランドを発見する
1000 年頃	d. ソルフフィンヌル・カルルセヴニがヴィンランド移住を試みる
1075 年頃	ブレーメンのアダムが『ハンプルク大司教事績録』にてヴィンランドに言及する
1100 年頃	アイスランドで書物の執筆が開始される
1200-30 年頃	「赤毛のエイリークルのサガ」「グリーンランド人のサガ」が執筆される
1961-68 年	イングスタ夫妻がニューファンドランド島で北欧式住居を発見する(ラン ス・オ・メドウ遺跡)
2005 年	漫画『ヴィンランド・サガ』の連載が開始される

2. 現代日本のヴァルハラ解釈

比較に際し、ヴァルハラという北欧神話に登場する概念を軸とします。まず、ヴァルハラとは何か。北欧神話の主要資料のひとつである『詩エッダ』には神話に関する詩が 15 篇ほど保存されていますが、その内「ヴァフスルーズニルの歌」では、以下のようにヴァルハラが描写されています(谷口 1973: 257)。

すべての戦士らは オーディンの庭にて 日ごと戦いあう 彼らは死者をえらび
馬にまたがり戦より馳せ帰り 互いに打ち解け 席を同じゅうす

つまり、北欧神話の世界において、最高神オーディンは地上で戦死した戦士を自分の元を集めており、彼らはそこで毎朝起きてはお互いに戦って殺し合うのですね。しかし彼らはもう死んでいるので殺されても蘇り、戦いが終わると宴会の席に着き、美しい女性神であるヴァルキューリアたちを侍らせて楽しく飲み食べます。このような死せる戦士たちが集められているオーディンの館がヴァルハラ (Valhøll、字義通りには「戦死者の館」と呼ばれています。漫画『ヴィンランド・サガ』でも登場人物たちがしばしばこのヴァルハラに言及します。主要な4つの場面を見てみましょう。

2.1. のっぽのトルケル

最初に登場するのは“のっぽ”のトルケルという人物です。あるヴァイキング集団を率いるトルケルは、ヴァルハラについて以下のように語ります (『ヴィンランド・サガ』第3巻、179頁。以下、本作からの引用は巻号、ページ数のみ示す)。

神々の使者戦^{ヴァルキリー}乙女たちは常に勇者の魂を求めている
神々の戦士^{エインヘリアル}と呼ぶに相応しい勇者をな
まさに戦い まさに死んだ者だけが
虹の橋^{ビフロスト}をわたり天界の戦士^{ヴァルハラ}の館に住むことを許される

この描写は、まさに『エッダ』に見られるようなヴァルハライメージを表しています。のっぽのトルケルという人物は 1000 年前後にイングランドで活動した実在のデンマーク系ヴァイキングをモデルとしています。漫画のなかのトルケルはとにかく戦が好きで、勇敢に戦って戦場で死を迎え、ヴァルハラに行きたいと願っています。この場面でトルケルと部下たちは、たった 500 人で 1 万 6 千ものデンマーク軍を相手に戦いを仕掛けようとしています。無謀すぎる行為ですが、トルケルたちにとって戦死はヴァルハラに行くための手段なので、望むところというわけです。このように、この作品では最初に『エッダ』にもとづく北欧神話のヴァルハラ像が読者に提示されますが、物語が進むにつれて描き方が変化していきます。

2.2. 主人公トルフィン

次にヴァルハラが登場するのは主人公トルフィンの夢のなかです。トルフィンはアイスランドで生まれ、6 歳のときに父親をあるヴァイキングに殺されてから、仇の船に乗り込んで復讐の機会を窺ってきた人物です。トルケルのような戦士たちがひしめき合う、暴力に満ちた戦場で 17 歳まで育ちました。しかし、紆余曲折あって、二度と人を傷つけない、暴力と決別するという誓いを立てることになります。この誓いの少し前、トルフィンは夢を見ます。夢のなかで彼は地下へと落ちてゆき、血の海に浸りながら戦う数多の戦士たちを目撃します。身体が傷つ

き腐り落ちていくにもかかわらず、高らかに笑いながら殺し合う彼らを見て、トルフィンはず、^{「なんだ…ここ……ヴァル……ハラ……？」}とつぶやきます（第 10 巻、182 頁）。たしかに『エッダ』でもヴァルハラ^{ヴァルハラ}の戦士たちは「気晴らし」（skemmtun）や「遊び」（leikr）として戦っていたので、この描写はヴァルハラを想起させます。しかし、血の海のなかでゾンビのような外見の男たちが殺し合う光景はかなり陰惨で、トルフィンや読者の目には救いのないものとして映ります。少なくともトルケルが憧れをこめて語っていたような死後の樂園には見えません。このように、物語が進み、主人公が暴力と距離を取るのに従って、戦士たちの希求する樂園であるはずのヴァルハラは輝きを失っていくことになります。

2.3. ある戦士の最期

次にヴァルハラが登場するのは、バルト海で起こった激しい戦の最中です。戦場で、トルケルの部下である一人の戦士が死を迎えようとしています。彼は当初、自分は最期まで勇敢に戦ったのだから、必ずヴァルハラに行けるはずだと信じています。しかし、死が近づき何も見えなくなっても、全く迎えは来ません。薄れゆく意識のなかで、聞いていた話と違う、^{「戦士の館}なんて ウソッばち……」とつぶやきながら、彼の人生は終わります（第 22 巻、35 頁）。この場面には、11 世紀の住人ではなく、21 世紀に生きる読者にとって馴染みのある死生観が反映されているのではないのでしょうか。現在でも死後にどうなるのか解明されているわけではありませんが、神話や宗教で語られてきた死後の世界はどうやら事実ではないらしい——と科学的思考の時代に生きる読者の多くは考えているでしょう。その死生観に照らせば、バルト海の戦場で息絶えた戦士の描写は非常に 21 世紀的だといえます。

2.4. なぜヴァルハラに行きたいのか？

そのような現代の価値観を思わせる描写は物語が進むにつれて増えていきます。ヴァルハラが次に登場するのは、主人公トルフィンがヴィンランド、すなわち北米大陸の開拓を進めるなかで、開拓団の一員である元戦士がトルフィンとの出会いを回想したときです。この元戦士が率いていたヴァイキングの戦士団がトルフィンの船を襲撃しようとして捕縛されたとき、トルフィンは彼らに、なぜヴァルハラに行きたいのかと問いかけました。戦士団の親分が来るべき^{ラグナロク}「最終戦争」に備えるためだと答えると、トルフィンは重ねて、なぜ未来に「最終戦争」が来ると信じて疑わないのか、ノルン（北欧神話において運命を司る三女神）が予言したというが、なぜその予言を信じるのかと畳みかけます。最初は言い返していた親分も、最後に「みんな女神の決めた予定どおり 自分ではなにも決断しないわけだ 楽しいかい？それで」と問われるに至り、言葉を失いました（第 26 巻、150 頁）。その後、この親分と部下たちはトルフィンと共にヴィンランド開拓をめざす心強い仲間となります。神々の予言に従うのではなく、自分で決断することを選んだのです。この自己決定を重視する点も、基本的人権が認められ、個人の意思を尊重することが基本理念となっている 21 世紀の価値観に近いのではないのでしょうか。また、物語全体を追っていくと、多神教である北欧神話の神々であれ一神教のキリスト教の神であれ、人類の上位に存在する（と信じられている）絶対者に運命を委ねたり、社会の常識に

埋没して責任を放棄したりするのではなく、自分自身で考え決断すること、つまり人間の自由意志の尊重が暴力を乗り越えるための鍵だと示されているように思えます*6。このように、漫画『ヴィンランド・サガ』は中世北欧という現代日本とは時間的にも空間的にも遠い世界を舞台としながら、現代的な考えを仮託された登場人物たちを通じて、今では「あたり前」の考え方や習慣が1000年前には「あたり前」ではなかったことに気づかせてくれます。

3. 漫画から研究へー女性奴隷アルネイズ

次に、創作と研究の架け橋として『ヴィンランド・サガ』に登場するアルネイズという人物について現在考えていることをお話しします。アルネイズはスウェーデン出身ですが、故郷を襲撃されて幼い息子を失い、自らも奴隷の身に落とされたという境遇の女性として登場します。彼女は奴隷としてデンマークの大農場で働いていましたが、あるとき同じく奴隷となっていた元夫のガルザルと再会します。しかし、ガルザルはアルネイズを取り戻すために農場の護衛と戦った末に捕まってしまう、彼を助けるためにはアルネイズ自身が暴力の嵐のなかに飛び込む必要があるという状況に追い込まれました（アルネイズは、自身の過去を語る際に「戦い」を「嵐」と表現します）。アルネイズは主人公トルフィンの奴隷仲間であり、同じく友人であるエイナルという人物が、彼女が望むならガルザルを助けるために力を貸すと言いますが、アルネイズは元夫を見捨てる決意をします。なぜなら彼女は奴隷として仕える主人との間の子を身ごもっていて、この子供を平和に育てるという目的を優先したいからです。そのために、今度こそ「男達の嵐から子供を守る」、嵐をやり過ごすと言います（第12巻、62頁）。ところが、彼女は結局元夫を見捨てることができませんでした。せめて傷の手当てだけでもとガルザルに会いに行ってしまう、戦いに巻き込まれて命を落とすことになります。彼女の死は物語の転換点となり、主人公たちはアルネイズのような暴力の犠牲者を二度と出さないため、ヴィンランドに戦争のない平和な国を作ると誓います。しかし、もしアルネイズがこの局面でガルザルを見捨てて生き延びていたら、どうなったでしょうか？

アイスランドのサガには「強い女性」と類型化されている登場人物がしばしば登場します。現存するサガ全体のなかでは男性の登場人物の方が多く、目立った活躍をする女性は少ないですが、『ラクスデーラ・サガ』*7には例外的に主体性を発揮する女性たちが複数登場します。そのなかで最も有名なオースヴィーヴルの娘グズルーンを、私は漫画『ヴィンランド・サガ』のアルネイズから連想しました*8。グズルーンは「美貌才智とも第一の女性」としてサガに登場し、生涯で4度結婚し、3度夫を亡くします（1度は離婚）。晩年、息子から「誰を一番愛したのか」と尋ねられ、「わたしはね、一番愛している人に一番ひどいことをしてしまったのだよ」

（*Þeim var ek verst, er ek unna mest*）と答えます（谷口 2024: 563）。このセリフが誰を指すのかは明示されませんが、読者の多くは若い頃の恋人であったキャルタンを思い浮かべるでしょう。というのも、グズルーンは2度目の結婚が終わった後にキャルタンと出会い、二人は美男美女の理想的なカップルとして人々の噂になっていました。しかし、キャルタンがグズルーンの制止も聞かずにノルウェーに行ってしまったことで、すれ違いが生じます。数年後にキ

ヤルタンは帰国しますが、結局二人は別々の相手と結婚しました。その後、グズルーンとヤルタンとの間には愛憎入り交じった復讐の応酬が繰り広げられ、最終的にグズルーンは自ら夫や兄弟を扇動し、ヤルタンを殺害させることになるのです。このように、自分で武器を取るまではしないものの、知恵や言葉を駆使し、周囲の男性を動かすことで目的を果たす女性たちが、サガ研究では「強い女性」と呼ばれています (Jóhanna Katrín 2017)。グズルーンはまさにその代表で、強い意志と賢さ、行動力で自らの運命を切り開いた女性として描かれています。一見するとアルネイズの人生とは重なりませんが、もしアルネイズが運命の岐路で元夫を見捨て、戦に巻き込まれずに生き延びて晩年を迎えていたら、過去を振り返ってグズルーンのように「一番愛している人に一番ひどいことをしてしまった」とつぶやいたかもしれません。

サガは「強い女性」について印象的に語りますが、ヴァイキング時代や中世の現実には、性別にかかわらず、グズルーンのように強くは生きられなかった、人生の目的を果たせず挫折した人も多かったはずです。『ラクスデーラ・サガ』のグズルーンと『ヴィンランド・サガ』のアルネイズとはコインの表と裏のように、社会の理想と現実を示しているかもしれません。このように考えると、漫画は第一に現代の読者に向けて書かれた創作ではありますが、サガが語らなかった過去の側面を照らし出している可能性もありそうです。アイスランドの文学研究者ソウルディス・エッダ氏は漫画『ヴィンランド・サガ』におけるヴァイキング像について考察し、以下のように述べていますが、私もまさにこの漫画を読むことで新たな解釈の道を見つけたといえます (ソウルディス・エッダ 2022: 28)。

『ヴィンランド・サガ』を中世文学と全く関連付けずに楽しむこともできるが、もしそれがなされれば、サガの素材の理解が双方の理解を深めるだろう。もし読者がアイスランドの中世文学の世界を知ったら『ヴィンランド・サガ』に登場する舞台設定や歴史上の人物はより身近に感じられるだろうし、他方で中世テキストにも、より詳細かつ視覚的な漫画『ヴィンランド・サガ』を読むことで新たな解釈の道が開けるかもしれない。

さらに、この解釈は現代アイスランド社会の再考にも寄与する可能性を秘めています。現在のアイスランドは世界経済フォーラムが実施するジェンダーギャップ指数ランキングで 16 年連続首位にあり、ジェンダー平等というイメージが強いと思います。ジェンダー平等社会への転換点としては 1975 年の「女性の休日」というストライキと 2008 年の経済危機がよく言及されますが、アイスランドでは中世から女性が強かったのだという言説も稀に見られます (たとえば Michael Chapman 「男女平等とアイスランド」)。たしかに中世のアイスランドや北欧には同時代の他地域と比べ女性の権限が強かった側面はありますが、それでも昔から男女平等だったわけではありません。また、近年ではアイスランドのジェンダー平等というパブリック・イメージが国際的に浸透する反面、いまだに社会に残る性差にもとづく差別や性暴力、外国人女性の立場の弱さなどの問題が見えにくくなっているという指摘もあります (塩田 2025)。サガのなかの见えない存在に目を向けることは、現代アイスランド社会の再解釈にもつながるかもしれません。

4. おわりに

最後に、以上のような研究をどのように授業に活用しているのかを紹介します。漫画『ヴィンランド・サガ』に関する分析は、現代の北欧神話受容を考える授業の題材としてきました。漫画の描写と中世に書かれた資料を読み比べることで、時代が異なれば、「あたり前」の考え方や行動も異なることに気づけます。さらに北欧史の授業では、ヴァイキング時代について解説した後、受講生自身が『ヴィンランド・サガ』の一部を読み、時代の特徴がどのように反映されているかを分析する課題も出しています。この作品が緻密な時代考証にもとづいて社会像を構築しているからこそ可能な課題ですが、講義で習得した知識の確認に加えて、歴史的知識を応用して資料を読むことで現代社会を相対化し、異文化への想像力を養う訓練にもなると考えています。また『ヴィンランド・サガ』に限らず、歴史上のどこかを舞台とする現代の創作作品を見たり読んだりすることは、過去の世界の新たな理解につながるだけでなく、翻って現在の私たちがどのような時代を生きているのかを考えるヒントにもなると思い、他の作品も関連するテーマの授業で積極的に紹介しています。

註

- 1 本稿は、2025 年 6 月 25 日に開催された東海大学文化社会学部研究交流会での報告内容をまとめたものである。
- 2 サガに関しては、主要作品の翻訳集の復刊で監修を担当した（谷口 2024）。
- 3 「日本のマンガにおける北欧神話受容史の萌芽研究」科学研究費助成事業挑戦的研究(萌芽)、代表：伊藤盡、分担：松本涼・杉本 B.Jessica・井口篤、2017-20 年。
- 4 Sayaka Matsumoto, “Rewriting the Myths and Culture: *ONE PIECE*, *The Mythical Detective Loki* and *Saint Young Men*”, *Magnað Manga - Conference on Manga studies*, Reykjavík, 2018 等。
- 5 「日本の大衆文化におけるヨーロッパ中世主義の受容と展開」サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」、代表：大貫俊夫、分担：小宮真樹子・白幡俊輔・松本涼・岡和田晃・健部伸明、2022-23 年。
- 6 ただし、自由意志は暴力を行使する決断も導きうるため、物語の最終局面では自由意志同士の対立も明確に描かれる。第 192 話「千年航路①」以降を参照（『ヴィンランド・サガ』第 27 巻・第 28 巻）。
- 7 『ラクスデーラ・サガ』（*Laxdæla saga*）の日本語訳は「ラックスー谷の人びとのサガ」というタイトルで、谷口 2024 に所収。
- 8 実際にアルネイズとグズルーンの比較を着想したのは、2019 年に放映された『ヴィンランド・サガ』のアニメーション第 2 期を視聴したときである。アニメでは原作よりアルネイズの心情描写が増え、「なぜ、なぜいつもこんなことばかり…」と声を震わせる場面もある。立場の弱い者が自分の意思とは無関係に戦いに巻き込まれ、犠牲になる状況に対する怒りが表明されており、より意思の強い女性として描かれているように感じた。

引用文献

- マーガレット・ウィルソン (2022) 『アイスランド 海の女の人類学』 青土社.
- 塩田潤 (2025) 「アイスランドにおける女性ストライキの形成要因」 鳴子博子編著『ジェンダーと政治, 歴史, 思想の交差点』 中央大学社会科学研究所研究叢書、213–234 頁.
- ソウルデイス・エッダ・ヨウハネスドッティル、松本涼訳 (2022) 「ヨームスヴィーキングルの過去と現在」『日本アイスランド学会会報』 41、1-33 頁.
- 谷口幸男訳 (1973) 『エッダ—古代北欧歌謡集』 新潮社.
- 谷口幸男訳、松本涼監修 (2024) 『【新版】アイスランド サガ』 新潮社.
- 松本涼 (2019) 「ヴァルハラは理想か？ 現代日本と北欧神話」『立命館言語文化研究』 31-1、189-202 頁.
- 幸村誠 (2005-現在) 『ヴィンランド・サガ』 講談社.
- Michael Chapman 「男女平等とアイスランド」 *Guide to Iceland*. <https://guidetoiceland.is/ja/history-culture/gender-equality-in-iceland> (2025/07/25 最終閲覧).
- Jóhanna Katrín Friðriksdóttir (2017). “Gender”. Ármann Jakobsson and Sverrir Jakobsson eds. *The Routledge Research Companion to the Medieval Icelandic Sagas*. London & New York. 226–239.
- Jón Karl Helgason (2017). *Echoes of Valhalla: The Afterlife of the Eddas and Sagas*. London.